

D-19 幻覚妄想の既往をもつ側頭葉てんかん患者の認知機能 - Wisconsin card sorting test による検討 -

国立精神・神経センター武蔵病院
東京大学 脳神経外科²

○村松玲美¹、足立直人^{1,2}、大沼悌一¹

一般てんかん外来において、幻覚妄想状態の既往のある例は全体の約5%前後とされる。こうした患者のなかには、明かな幻覚妄想が消退した後も極めて偏った認知行動があり、日常生活や社会適応上の問題を呈することがある。本学会では、幻覚妄想の既往をもつてんかん患者の認知機能について、神経心理学的評価および検討を行い報告する。

【対象と方法】国立精神・神経センター武蔵病院てんかん外来通院中の側頭葉てんかん患者のうち、幻覚妄想状態の既往をもつ16例(psy群)と精神病症状の既往をもたない24例(non-psy群)を対象とした。検査時の臨床的特徴を見ると、psy群は平均年齢38.8歳、発作頻度中央値は月単位、服用抗てんかん薬剤数は平均1.8剤、一方non-psy群は平均年齢34.1歳、発作頻度月単位、服用抗てんかん薬剤数は平均2.2剤であり、両群に差はなかった。なお精神症状が強く正確な検査実施が困難な例は予め除外した。両群に1) Wisconsin card sorting test (WCST)64枚法と2)ウェックスラー成人知能検査(WAIS)を実施した。

【結果】1)WCSTの達成カテゴリー数の平均は、psy群3.1、non-psy群5.9であり、psy群の有意な低成績を認めた($p<0.01$)。またユニークエラー数および連続する過剰正確反応総数において、psy群はnon-psy群に比して有意に多かった($p<0.05$)。2)WAISのfull scale IQ (FSIQ)の平均は、psy群89.1 non-psy群94.3であり有意な差を認めなかった。しかし下位項目の絵画配列において、psy群ではその意味を正しく把握できないことが有意に多かった($p<0.025$)。

【考察】側頭葉てんかん患者において幻覚妄想の既往をもつ群は既往のない群との比較により、幻覚妄想消退後もその知能に比して認知構造の歪みをもつ例が多く認められた。こうした認知障害の存在は、患者の日常生活や社会適応を阻害するものと考えられた。

D-20 側頭葉てんかんと前頭葉機能

1) 国立長崎中央病院精神科 2) 同脳外科 3) 長崎大学第2生理 4) 同精神神経科 5) 大分医科大学精神神経科
○高橋克朗¹⁾、馬場啓至²⁾、小野憲爾³⁾、川浪由喜子¹⁾、岡崎祐士⁴⁾、中根允文⁴⁾、藤井 薫⁵⁾

Standard anterior temporal lobectomyを施行した薬物不応性てんかんを対象に、その前頭葉機能を検討したので報告する。〈対象と方法〉側頭葉てんかん12症例、左側切除群(LTL)6例、右側切除群(RTL)6例。手術時年齢、罹病期間、発作頻度、側頭葉・海馬の切除範囲は両群間で有意な差を認めない。前頭葉機能検査としてRezaら(1993)が左側背外側前頭前野の機能と推測しているWisconsin Card Sorting Test (WCST)を128試行10回連続正答1カテゴリー達成の条件下で施行し、カテゴリー達成(CA)と保続性エラー(PE)について術前・術後の切除側別比較および群間比較を行った。〈結果〉(1)LTL:術前CA=7.5±2.3、PE=9.0±3.6、術後CA=7.7±2.8、PE=7.0±1.3、(2)RTL:術前CA=6.0±1.9、PE=17.8±9.5、術後CA=8.4±0.9、PE=9.4±3.2。Spreen and Strauss(1991)によれば、40歳未満成人の上記と同一条件下でのCAは5.6±1.0、PEは10.4±8.0であるので両群とも術前のRTLのPEを除けば、術前・術後の結果はいずれも正常範囲といえる。2群間比較では術前のPEが右側切除群の方で高い傾向($p=0.052$)にある他は差を認めない。切除側別比較では両群とも術後CAの改善傾向(LTL; $p=0.094$ 、RTL; $p=0.063$)を認めるが、PEには変化を認めない。〈考察〉術後両群ともWCSTでのCAの改善傾向を認めることから、てんかん原焦点の発作間欠期の活動が前頭葉機能に影響を与えている可能性は示唆されるが、学習効果の可能性も否定できないため、その判断は慎重であらねばならない。しかし、術前においても正常値を上回る成績であることを考慮すれば、発作間欠期のてんかん原焦点の活動の影響はほとんどないことが示唆される。もちろんWCSTが測定しうるのは広範な前頭葉機能の一部にすぎず、その他の機能についても検討する必要があることはいうまでもない。

D